

審査の結果の要旨

氏名 舘野泰一

受験者の博士論文の目的は、大学生初年次において大学生がアカデミック・ライティングを行うための協同推敲支援システムの開発を行い、実践を通じた評価を行うことにあった。本博士論文で取り扱った問題は、アカデミック・ライティング時における「協同推敲の質」改善である。

近年、大学のユニバーサル化にともない、大学初年次におけるアカデミック・ライティングの指導が多く大学のなされている。指導の中核をなす協同推敲は大学教育の正課課程内・外で導入されているが、協同推敲の質をどのように改善するかについて着目した研究は少ない。そこで、本研究では「協同推敲の質」を改善するために、ICTを活用した学習支援システムの開発を行い、実践・評価を行った。具体的には、1)正課課程内における学生同士のピアインストラクションをコンテキストとし「学習者が書いた小論文（プロダクト）をテキストとして、その論理構造を学習者が可視化しあい、ネット上で協同推敲を行うことを支援するシステム」（3章）、2)正課課程外におけるチューターによる学生指導を想定し「小論文を学習者が執筆しているライティングプロセスをチューターに対して可視化し協同遂行を支援するシステム」（4章）の2つを開発し、評価を行った。

開発したシステムを使った実践を行った結果、3章の実践では、学生同士の「論理構造に着目したピアインストラクション」を促すことができ、協同推敲が円滑に進んだ。4章の実践では、チューターの「文章生成過程に着目したコメント」を促すことができ、効果的なアカデミック・ライティング指導が可能になった。ICTを活用した協同推敲を支援するためには、協同推敲中に着目してもらいたい点を明確にし、その部分を「見えるようにすること（可視化）」が有効であることが示唆された。アカデミック・ライティングの協同推敲プロセスとアウトプットに着目し、自ら教育実践を組織化しつつ、評価を行い、開発したシステムの有効性を主張できたことは、非常にオリジナリティと社会的意義が高く、審査員からも高い評価を得た。

ただし、課題も残された。審査に当たった教員からは、1)本研究は大学初年次のライティングに関する支援を行っていたが、専門課程に入ったあとの支援に関してはどうするのか？ また大学に入る前の初等中等教育における作文指導においてはどのような提言が可能なのかといった疑問や、2)本研究自体が、人文社会科学の知的フレームワークの中で、どこに位置づき、今後、どのように言

説を相対化していくかについてより深い記述が可能なのではないかという要望が出された。また、3)本研究の中心概念である「ライティングプロセス」の「可視化」はオリジナリティのあるものだと思われるが、一方で、それ以外の支援方法についての検討がなされていない。また「可視化」という概念それ自体についても、より深い理論的検討がなされるべきである、といった意見や、4)本研究の提案した支援方法で、アカデミック・ライティングのパフォーマンスが向上しなかった学習者に対して、どのような別のアプローチがありうるのか、についての考察が足りていない、という指摘もなされた。これらの諸課題について、受験者と審査員の間で活発な質疑応答がなされた。

質疑応答においては、受験者から回答がなされたものの、一部には、まだまだ考察が足りてない部分があったことは否めぬ事実である。しかし、論文の構成・構造は明確であり、オリジナリティも高い。これらの諸課題は、受験者が今後の研究を通じて十分深化可能であり、かつ、受験者が今後の研究生生活をかけて探索可能であると考えて、審査員満場一致にて、本論文を博士（学際情報学）の学位請求論文に値すると認めた。